

カンボジアスタディーツアー

代表者 川上 聖加 (医学部看護学科3年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、

- ①カンボジアの医療現場の実態を知り問題意識の相違などを理解する。
- ②現地で活動している日本の医療者を見学し、各自の今後の看護師としてのキャリアのあり方を考える。

③カンボジアでは昔、音楽は虐殺に使われており、ネガティブイメージが強かったのですが、私たちは心の健康や豊かさを育むポジティブイメージのものにするために、楽譜を作って音楽の楽しさを伝える。

この活動は、これらの3つを目的とし、現地へ足を運んで実際に文化研修や学生交流などを行うことで主体的に学ぶ楽しさ、大学の理念でも求めている国際的な人材を養うことにも基づき、「大学」というあらゆる可能性を引き出す場所での今後について、後輩や同輩の道を広げる先導となるものです。

2. 実施期間（実施日）

令和元年8月17日から 令和元年8月22日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

今回のスタディーツアーでは、JICAの学校保健教育の補助として、ボランティアを行わせて頂いた他、自分たちが国内でもできることを考え、石鹸やタオルの寄付を学内で募り、現地の32校の小学校にプレゼントしました。そこには、手洗いの方法やタオルの保存の仕方などについて説明書きを残し、小学校の先生方から喜んでもらえたと感じました。しかし、カンボジアでは、石鹸などは盗まれやすいという現状があることも知り、引き続き石鹸やタオルを使って、手洗いがされているのか、また、使用できる状態を維持しているのかなど、プレゼントするだけではなく、その後も使ってもらえるように工夫することが必要であると考えました。

他にも、現地の小学校に建設されたトイレの視察にも同行させていただき、小学校の保健室についても見学しました。三つの小学校がモデル校として、トイレの建設が進んでいましたが、校内に捨てられた大量の家庭ごみの問題や、保健室が機能していないこと、学校の先生の衛生管理の意識の差など、まだまだ課題が多いと感じました。だから



こそ、何度も現地に訪れ、実際に先生に話をすることが大切であるのだと考えました。

また、UHSの学生交流では、学生同士でプレゼンテーションを行い、互いの教育プログラムについて共有しました。実際に授業も見学させて頂くなど、貴重な体験をすることもできました。UHSなどの国立大学に通う学生は、自分のためだけではなく、家族や村を代表してきているという意識があることがわかりました。学校は施設が整っているけれど、この人たちが実際に村に戻ったときに学校で使っていた道具や設備がないため、演習授業を通して、どのようにあるもので代用していくかなども考えていく必要があることも学んでいました。現地の学生との交流を通して、国も文化も違うけれど、誰かの役に立ちたい、助けたいという共通の看護観があることがわかりました。今後も継続して交流を持つことは、お互いにとって良い影響があると考えました。

その他、文化研修として、カンボジアの負の遺産と知の遺産を目にし、マーケットなどのローカルな部分に足を踏み入れ、カンボジア人の生活も身をもって体験することもできました。

さらに、帰国後、看護の学生にプレゼンテーションという形で発表させて頂きました。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、UHSの大学と本学が締結を結ぶことができ、今後も継続して交流を図る状況を整えることができました。



また、文部科学省のホームページにも掲載されていますが、JICAの活動で、カンボジアにおける学校保健の普及を目指し、現地の3小学校にトイレ・手洗い場を建設されていますが、その視察にも同行させて頂きました。

なお、帰国後に同輩、後輩へ自らが足を運んで学んだことやカンボジアの良さなど、発表をさせて頂き、後輩や同輩へのキャリア形成への情報提供として影響を与えることができたのではないかと考えます。

またこのプロジェクト事業に参加するにあたり、よりボランティア活動に活発に参加できるよう、また経験して得た学びや情報を共有し、互いに刺激し合えるよう医学部内でボランティアサークルを結成しました。当サークルでの活動やそこで得た学びや反

省点は、後輩に引き継ぎ、継続的に活動してもらう予定です。もちろん、医学部内だけでなく、このプロジェクトに参加することで、他学部の方々とともに学びを共有でき、互いにより影響を与えあえると考えます。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

実際に現地の病院で働く日本人医師のもとを訪問して話を聞くなど、開発途上国の現状と日本の医療者が貢献している事実や日本の保健室が他国に生かされていることなどをグループ内で意見交換を行い、各自の今後の看護師としてのキャリアのあり方を考えることができました。国内外を問わずに社会に発信し、学び続ける態度や、主体的に多様な他者との関わり、他者の意見や価値観を尊重し、相互理解に努めようとする協働性やコミュニケーション能力などをさらに伸ばすことにも繋がったと考えます。

また、同輩へのキャリア形成への情報提供として帰国後プレゼンテーションをさせて頂きました。その効果として、「文化の違いを理解するためには、まず現地を訪れることが大切であると思った。遺跡巡りや現地の学生との交流に興味を持った。」「支援物資、整備を届けるには現地の人が使えそうな物や説明は必要なことが分かった。」「カンボジアに行って、福祉活動をするだけでなく、その国の文化や背景を理解した上で、必要なことをしたり、学生や色んな方と関わっていく中で築くホスピタリティや人の暖かさなど、全世界共通で看護にとって重要なことであると学ばせてもらった。」など、多くの学生から反応が返ってきました。自分たちが現地に赴くことで、より具体性や現実性をもって周囲の人に伝えることができ、それによってより興味をもってもらうことが可能になったのだと考えました。

今回初めて海外渡航した学生もおり、国外に出ることで、日本の中での恵まれた学習環境の価値や生き方の選択ができる意義を感謝し、それらを必要とする方々に支援できるような看護職としての姿勢を改めて見直し、今後を見据え、自分たちが情報の発信源となり同輩後輩へ伝えることができ、大変有意義でした。



～帰国後の発表会のようす～

6. 反省点・今後の展望（計画）・感想等

実際に現地を訪れてみて、教育体制を整えることや、都心以外のインフラが整っていないなかったり、ドルでもらえる職業とカンボジアの通貨（リエル）でもらえる職業とで、

社会格差があったり、支援が必要なことは多くあると思ったけれど、実際私たちができることは少ないと感じました。だからこそ、先生や大人の活動を見て、どんなことならできるのか、どんなことをされているのかを一緒に立ち合わせて頂いてみる事が出来たのは良かったと思いました。

実際に現地の小学校に訪問した際、以前日本から寄付してもらったという井戸を見ました。現在は草に埋もれていたり、壊れて使うことができない状態が何年も続き、直すお金もなく放置され続けている現状など、支援をして満足するのではなく、継続した支援を行うことのできる体制や、支援に見合った説明、本当に必要としている支援であるかを見極めることが重要であると改めて学ぶことができました。

UHSの学生と交流してみて、日常から英語を使用していることもありますが、流暢な英語が印象的であり、日本でももっと英語は学ぶべきだと感じました。今回、締結を結ぶことが出来たため、今後ますます互いの発展を願い、生涯にわたり学び続ける態度や、主体的に多様な他者とのかかわり、他者の意見や価値観を尊重し、相互理解に努めようとする協働性やコミュニケーション能力などをさらに伸ばすことにも繋がり、看護職者になる上でも重要となってくるのではないかと考えます。

7. 実施メンバー

代表者 川上 聖加（医学部3年）

構成員 宇都宮 花帆（医学部3年）

中島 望美（医学部3年）

8. 執行経費内訳書

配分予算額		200,000円		
執行経費（品目等）	数量	単価(円)	金額(円)	備考
高松—プノンペン	3	66,667	200,000	航空機代（不足分は自己負担）
合計			200,000	